

衰えている生徒たちの「読み」の力を踏まえて——実践提案を読んで

学習者の視点に立ち、その違いを学習に生かす

前富山大学教授 あんどう 安藤 しゅうへい 修平

1 実践提案の共通点

定評のある『故郷』について「生徒の多様な『読み』を授業に生かす」にはどうすればよいか。三つの実践提案を興味深く読ませていただいた。

三者に共通していることは次の三つである。

- A 教師主導の指導はもはや無意味であること。
- B 学習者の視点に立つことが大切であること。
- C 学習者の違いを指導の中に生かすこと。

中学校の現場で、この三点を基底に据え、方法を工夫して日々実践されておられることにまずもって敬意を表したい。なぜなら私の見る限り、このような国語教室になかなか出会えないからである。

2 教師主導から学習者中心へ

共通点A

このことは、かなり言い古された言葉であるにもかかわらず、未だに強調されなければならないことにこの国の国語科教育の問題がある。

では、なぜ「教師主導」を捨てること

ができないのか。筆者自身も若いときははりそうだったが、教材研究を重ねて得た結論は絶対に正しく、生徒にどうしても教えたくなる。教えるのではなくて引き出すのだということはアタマでは分かっている、つい自分の結論を持ち出したくなるのである。また、「引き出す」のだと言い聞かせても、自分の結論がある指導の筋道が自分の結論に向かうようになってしまうのだ。また、生徒も「自分なりの答えでいい」ということには不安で仕方がない。結局、教師の結論を欲しがるから教えてしまう。ここを克服する道が必要なのだ。情報過多の海の中で溺れずに生きていくためには「吟味した上での自分としての判断」が何よりも必要になる。「教師主導から学習者中心へ」ということは一教科の問題ではない。本稿の提案者全員がこの立場に立っていることは極めて重要なことである。

3 さらに学習者研究

学習者の視点に立つことの基底

共通点B・C

昨今の教室は一昔前とは違う。「子ど

もが何を考えているか分からなくなる」

「教えたはずなのに、確かめるとほとんど分かっていない」「学習以前の問題、席に着かない、指示に従えない」といった状況が確実に増えてきている。だから私たちはもっと生徒そのもの、つまり生徒たちの「くらし」を探らなければならぬのではないか。いつの世にも教師と生徒の価値観にはズレがあったが（そのことが意味をもっていったのだが）、昨今のそれはズレではなく、乖離もしくは異次元ではないのか。少なくとも私にはそう見える。

実践提案①の筆者は「現代の子どものたちの特徴」を、端的に「言葉で考えたり読んだり書いたりするのは苦手、まずは行動、言葉はその後」「言葉以外の表現力や表現手段は豊かで巧みなのに、仲間と協力して何かを創り出すことは苦手。強く求めてはいるものの、コミュニケーション能力や協同の気持ち、および技能が著しく低い。」と記し、また実践提案②の筆者も「学習者の日常の読書生活の変化と個人差の拡大が急速に進む中で、教える側の意識と学習者の実態の乖離にとまどう指導者も多い。」と述べている。ここから「学習者の視点に立つ」

指導が見えてくるはずである。

「学習者の視点に立つ」「学習者の違いを指導の中に生かす」といっても、学習者をどのように把握しているかが肝心である。従来のような楽観的な生徒観に固執していたのでは生徒は見えてこない。教師自身が見方を変えられるか、自分自身を変えられるか、といった問題である。「現代の学習者」研究をもっともっと深めなければならないと思う所以である。

4 「故郷を」ではなく「故郷で」——学習者の視点に立つこと的前提

共通点A

次に、学習者の視点に立つ前提を考えよう。

まず、「なぜ学校で文学作品を教材として読ませる」のどううか。誤解を恐れずに言えば、その答えは二つ。一つは「人間形成」「最近お目にかかれなくなった言葉だが」のため価値あるものを読ませ、その価値に迫らせたいからである。もう一つは将来のため、文学作品の「読み方」を身につけさせたいからである。

戦後の実践の流れは、この二つの間を行ったり来たりしてきた。前者に傾けば

「道徳の時間」に近似し「内容主義」と批判され、後者に傾けば単なる訓練に終始し「技術主義」「形式主義」と誇られ、両者の融合は未だ整っていない。

しかし、私は、どちらにも傾斜することなく、内容のおもしろさ（すばらしさ）に乗じて「読み方」を学ばせていくのが良いと考えている。別の言い方をすれば、前者は「故郷を」であり、後者は「故郷で」という立場とも言える。「故郷を」教えることになれば、どうしても「教師主導」にならざるを得ないであろう。だから「学習者の視点に立つ」には、「故郷を」ではなく「故郷で」の立場に立つことが必要なのである。

5 学習目標の吟味と設定

学習者の視点に立つことと具体

共通点B

「故郷で」という立場に立てば、「何を」を明確にしなければならぬ。つまり「学習目標」を設定しなければならなくなる。「目標」を設定するのは、教師の側から言えば、一つに、生徒の学習の明確化である。いろいろすることがあるが、「目標」に沿ったものに

整理できる。捨てることができるからである。二つに、目標到達への筋道が描きやすくなる。別の言葉で言えば、どのような「学習活動」を用意すればいいか、編み出しやすくなる。三つに、「目標」到達の状況が把握しやすくなる。つまり学級全体や個々の「評価」が可能になる。といったところであろう。その際、重要なことは、目の前の生徒の力に照らし合わせ設定した目標（あるいは設定しようとした目標、多くは教科書などに示された目標）を吟味することである。指導を加えれば全員が到達できるのか、それとも一割は無理なのか、といった具合にある。もし、目標が高すぎるのであれば、レベルを考慮するか、もしくは別の「目標」に変えることになるだろう。この吟味を経て、直ちに「評価」の具体的な方法とスケール（規準や基準）を描くことである。また、目標設定時に評価の具体的方法を描くことが必要である。これが「学習者の視点に立つ」との具体である。本稿の三つの実践提案には明記されていないが、恐らく筆者と同様な立場であろうと推察できる。このことは後述する。

6 「故郷」の「多様な読み」を生かす

学習者の違いを指導に生かすこと

共通点C

- (1) 「多様な読み」を生かす第一は、「生徒に聞け！」「生徒の姿に学べ！」ということである。

本稿の実践提案②にあるように、『故郷』の初発の読みの状況を「アンケート」として把握し、それを踏まえて方法を考案していくという方法は、「教材」と「生徒」を乖離させない優れた方法である。この提案の場合は、学級ごとではないが、授業は学級ごとになされるから学級ごとにまとめ直せば、学級ごとの指導方法を描くことができる。記名させれば個々の姿がもっと具体的にになる。

また、実践提案①の「生徒の三種類の『読みのスタイル』」も「つぶさに観察していく」と述べているように「生徒に聞け！」の表れである。また実践提案②の「ストーリーをとらえることそのものを目標とした読み」もそうである。提案者は「ストーリーがとられない学習者の増加を考えると、このこと自体を目標にした学習活動を明確に位置づけることも大切なポイント」と

述べている。

- (2) 「多様な読み」を生かす第二は、「学習者の違い」を指導の中に生かせ、ということである。

実践提案①の「読みの三スタイル」をそのまま読みの方法としていくのがこれに当たる。また同提案の「ジグソー学習」の中の生徒たちが担当場面を「寸劇風・漫画風・クイズ風・テレビ解説風など」の中から選んで発表していくところもそうである。個ではないが「選んでいい」ということが「違いを生かす」ことになる。

また、実践提案③の「生徒の価値観の違いに着目した授業」もそれである。この筆者は「従来の授業では、ともすると価値観に起因する個人的な『読み』を封じ込め、『一つの正答』に収束させることが多かった。それは、『そう読む自分の否定につながり、生徒から文学本来の楽しさを奪うことにもなっていた。』と述べている。この筆者の指摘は正しい。

(3) 「多様な読み」を生かす第三は、目標到達に向けてのさまざまな方法を工夫せよ、ということである。

登山にたとえようと、山頂は「目標到達」。山頂に立つにはいくつかの登山道があ

る。一気に極める上級者向けの直線的な道、ゆっくりとなだらかに設定された初心者向けの道、山小屋を経由する道、ちよつと時間がかかるが高山植物の群落を楽しむことができる道など、「目標達成」への道筋は一つではない。しかし、私たちは本当にいくつもの登山道を見つけていたのだろうか。文学教材の指導の方式はこれだ、と決めてかかっていたのではなかったか。

実践提案①は、生徒自身に「三つの登山道」を選択させ、それぞれの登山道から登らせ、途中、キャンプ地での「交流会」を経て山頂の山小屋で「発表会」と「まとめ新聞」を作成させる、ということになるか。

実践提案②は、登山する生徒の体力（能力）と興味・関心をまずおおまかに捉え、ゆるやかな登山道（「ストーリーをとらえることそのものを目標とした読み」）(1) 絵コンテ、(2) 三人称視点に書き換え）から登り始め、お花畑で（「人物場面を選び、読みとりを検討する読み」、高山植物の楽しみ方へチャートの絵を描く）や湖で（「語句の意味を考える読み」、を的確に押さえながら山頂に立つ）。

実践提案③は、「故郷岳」の登山道の

数々を示してくれた。1. 作者や時代背景に着目した授業、2. 構成に着目した授業、3. 人物描写に着目した授業、4. 生徒の価値観の違いに着目した授業、5. 音読を生かした授業、である。これらの方法は、生徒たちの意欲と能力からどのように組み合わせると良いのか、と考えるのが至当であろう。

1から5の方法に限らず、それぞれ方法にはメリットとともにデメリットがある。そのことを意識しないと「この方法が正しく、他の方法は間違いである」などと主張することになる。そうではなく、それぞれの特質を生かすことである。大切なことは、その方法によって生徒の「読み」の力が確実に高まることなのである。

生徒の意欲と能力を押さえた授業を構想しても、もちろん、途中で息が上がって登頂は無理と判断せざるをえない生徒も出てこよう。しかしこうした生徒でも、お花畑での可憐なコマクサに感嘆の声をあげたではないか。部分であるとしてもその生徒なりの「学習が成立した」のであり、その積み上げを工夫していきたいものである。

7 いくつかの問題

三つの実践提案の問題点の一つは「評価」である。スペースの都合で記述できなかったこともあろうが、例えば、実践提案①のこうした実践によって生徒たちの「読み」がどのように、どの程度深まるのか。また実践提案②の「チャートの絵」がどのように「読み」に関わっていくのか。実践提案③の、例えば「価値観の違いに着目」した授業は、授業の活性化や楽しさの醸成につながることは想像できるが、そのことと「読み」の深まりとが結びつくのかどうか。さらなる実践での評価・検証を続けて欲しいと思う。

目の前の生徒の「読み」の力はかなり落ちているという認識は、もはや疑うべくもない。しかし、よりの確な方法があるはずであり、その一つの段階が今回の「生徒の多様な『読み』を授業に生かす」である。多くの教師による実践的な開発が待たれる。まさに「歩く人が多くなれば、それが道になる」のである。